

## 令和2年度「全国家庭教育支援研究協議会」ワークショップ・総括コメント概要

本資料は、令和3年2月18日に開催した令和2年度「全国家庭教育支援研究協議会」における各グループでのワークショップ後のアドバイザーからいただいたコメント及び、ファシリテーターからいただいた本研究協議会の総括コメントを、文部科学省において概要としてまとめたものです。

### 【ワークショップ後のコメント】

(アドバイザー (奥山氏))

各グループにおいて、意見が活発にされている様子を拝見させてもらった。私は普段、乳幼児の子育て家庭支援、地域子育て支援拠点の運営を行っており、保護者への関わりは非常に大事な視点である。子育て支援センターや子育てひろば等の地域子育て支援拠点においては、「ここに来たら何かゆったりできる」、「上から指導されない」、「自分が思いどおりに過ごせる」、「来たらとても気持ちが軽くなった」、「しゃべったらすっきりした」というような環境を提供していくということが、乳幼児を持つ家庭への支援者にも求められていることだ。その点、本日のテーマの「アウトリーチ」の部分は、とても勉強になった。

まず意外だったのは、文部科学省の調査によると、アウトリーチ型支援の場所として学校を挙げた市区町村の割合が77%で、家庭への訪問よりも多いということだ。学校という場を使って、家庭教育学級や保護者会という機会をうまく捉えて、小グループでの座談会のようなグループワークを丁寧にやっていくということが、幅広く捉える意味で重要であると感じた。もちろん、その場に出てこれられない保護者にも、どれだけ敷居の低い場所を用意できるのか、という工夫が求められているとも感じた。

各グループでも意見が出ていたが、アウトリーチ型支援をするということは、かなり信頼関係を構築しなければいけないものである。その信頼関係のキーワードは、「エンパワメント」、親の力を信じるということだ。それから、保護者の長所や良いところが発見できるということ、親子に対しての最大の理解者であるということが、最低限必要なことである。保護者は、指導的な関わりなのかどうか、ということはずいぶん分かるし、できないことを言われてもつらいと感じる。だから、その気持ちをまず受け止め、一緒に考えたいというスタンスで支援に臨んでいくということが重要なことだと思う。保護者が支援の場に出てくるとか、情報を求めてくるということ自体が、それだけで強みであり、すでに力を持っている方である、というように受け止めていくことが大事であると思った。

また、人材育成について、私たちも人材育成や人材確保は課題と考えるが、実は地域にはまだ力があると思っている。例えば、出産前後の時期で言えば、私たちが実施している「産前産後ヘルパー派遣事業」のニーズが多い。家事支援、特に料理が得意な地域の方にヘルパーの担い手になってもらっている。赤ちゃんの様子も見ることができ、やりがいのある仕事だと言ってもらっている。この産前産後の家庭に出掛けたヘルパーの多くは、「ファミリー・サポート・センター事業」の提供会員の登録をしておき、子供が成長しても、提供会員として引き続き同じ家庭に訪問することが可能だ。これは有償活動であり、気持ちがあり、有償ならそういった活動ができるという方を、私たちは掘り起こしていると思っている。「ファミリー・サポート・センター事業」やヘルパーの派遣をしている団体と連携して、地域人材の確保を一緒にやっていくということも手段ではないか。ぜひ子育て支援と、家庭教育支援チームとの連携を進めていきたいと、改めて思った。

(アドバイザー (中谷氏))

白老町の「訪問型家庭教育支援事業」では、約10年間、毎年50軒ほどの希望者宅、もしくは施設での訪問相談ができていて、そのコツとして、乳幼児健診の活用が大事だということをアドバイスした。乳幼児の保護者は、家庭教育への関心が低い方はいない。「いい子育てをしたい」、「何とか親としてもっと力を付けたい」と思っている。その保護者とつながってほしいし、直接つながれない場合でも、地域の子育て支援者をぜひ知ってほしいと思う。奥山氏のコメントにもあったが、私たちのチームでも、「ファミリーサポートセンター」、託児の活動員、「児童クラブ」、「児童館」等、他の活動や組織に所属しながらチーム員として活動しているメンバーもいる。そのため、すぐにネットワークがつくりやすいし、家庭教育支援チームのこともPRしてもらえる。

また、ワークショップではあまり話題に出ていなかったが、子供の生活習慣の乱れについてコメントしたい。このことは、家庭教育支援、あるいは文部科学省が担っているすごく大きな部分だと思っている。文部科学省説明資料にもあるが、社会の変化に対応した支援上の課題があることを知ってほしい。例えば、オンライン遊びの長時間使用による生活習慣の乱れは、今どこの学校でも、学齢期に入ってからでは遅いというような気持ちで、課題として感じている。ここを中心に、「早寝早起き朝ごはん」と絡めて、家庭教育支援員には、ぜひ家庭に伝えてほしい。

最後に、家庭への訪問希望を掘り起こすことについて、いくつかのグループから悩みが聞かれたが、訪問希望は必ずあると思うし、これまでも私は様々な方と連携することで掘り起こしてもらってきた。保健師が自分たちの訪問だけでは聞き取れない部分を、「こういう訪問支援員さんがいますよ」と言って紹介してもらったり、保育園や学校等でもそのような声掛けをしてもらったりする。パネルディスカッションにおいて松田氏も言っていたが、肌で感じてすぐ実施していくということの繰り返しで、家庭への訪問というものが継続してやってこられたと思っている。まずは小さな地域からでも、訪問希望を取ることから始めてはどうか。

#### 【令和2年度「全国家庭教育支援研究協議会」の総括】

(ファシリテーター (松田氏))

まず、オンラインでの開催が初めてだったということもあり、主催者、参加者共に難しかったというところで不備もあったが、全国各地の参加者が遠隔でつながることができるツールを、私たちが身近に手に入れているということに可能性を感じた。方法に関しては、日々練っていかないといけないと思うが、そういう意味では、端緒が開かれたような場になったのではないかと思う。

パネルディスカッションにおける3つの地方公共団体の事例は非常に示唆に富むものであった。また、可能な範囲でワークショップを見て回ったが、家庭教育支援というものは、奥山氏や中谷氏の活動も含め、活動を通して子供や保護者の笑顔が繋がっていくというものだということを、とても強く感じた。ワークショップでは、家庭教育支援の共通の課題として、各地域で取り組んできた人材の確保や、そのための財源の問題、届けたい方にどう情報を届けていくのか、どのように繋がっていくのか、という長期的な課題が今回も挙げられていた。ある種答えがない課題に対して、地域ごと、あるいはそれぞれの関係者が、様々な工夫している様子や、具体的な取組を情報交換することができ、何か元気が出てきたような時間ではなかったかと思う。

冒頭で文部科学省から、ネットワーク、フットワーク、チームワークの3つのワークという言葉があったが、私は素晴らしい言葉だと思った。特に今回はネットワークということで、情報交換をしながら、解決策を外に開いて考えていくという可能性というものを、強く感じた時間であったと思う。

様々な課題に対し、日々対応するのは大変だが、外に開くことで、話し合っているうちにその課題の

さらに奥の課題が見え、その課題に対する違うアプローチが提案できる、そういうエネルギーが出てくるのではないかと思った。

昨今、社会の変化が激しく、またその変化により、各家庭や子供の状況が多様化しており、困難性や課題が多様に、あるいは複雑になっている。その中で、家庭教育支援は、どの子供にも自分の好きなものをしっかりと見つけてもらう、持って生きていくということや、どの保護者にも、子供を育てるということは仕事という形でつらいものではなく、むしろ自分にとっても楽しい、笑顔が出る、自分が変わっていくひとつの出来事だ、ということ伝えていくために、さらに重要になっていると思う。それを皆で手を取り合って進めていくという場面を感じることができて、勉強になった。「アウトリーチ」という言葉がテーマになっているが、これは「手を伸ばす」という意味だ。様々な手の伸ばし方があるし、逆に、手を伸ばされた方が、その手を掴んでくれるのかということも、ひとつの大きな課題でもあると思う。ただ、これはじっくり待つということが大事だと思うし、お互いが手を伸ばし合って、つながった時に生まれる幸せな気持ちをひとつの糧にして、頑張っていくことができればと思う。

### 【参 考】

<ワークショップ>

(ファシリテーター)

松田 恵示 氏 (国立大学法人東京学芸大学 理事・副学長)

(アドバイザー)

奥山 千鶴子 氏 (NPO 法人 子育てひろば全国連絡協議会 理事長)

中谷 通恵 氏 (白老町家庭教育支援チーム 「びんぼーん」 コーディネーター)

パネルディスカッションのパネリスト (宮城県、滋賀県、掛川市)